日 P な 師ね 日 走っ 11 心 江 に 戸名物 せ 入 ると、 わ 0) 寒く 押 火事と、 し詰 てよ つ た暮 物 晴 盗 の二十 り れ た天気 騒ぎがしだ \_\_\_ 日 が 0 つ 真夜 e st づきまし に 繁 中。 < た。 なっ ろ、 で

「おや?」

よう 0 で 神 に 田 眼を 鍋 町 覚しました。 0) 呉服屋、 翁き 土 屋な 蔵 0 支配人孫六 0 方 から、 は、 異様な物音が 何 か 物 に<sub>おびや</sub> 聴えて かされる 来た

う 翁 千 に 屋 当 両 土蔵 てる 暖簾を の中 た つ め に 7 に、 は 掛 お ります。 けたまま正月は迎えられな 商売物 ひと工面し 万 の呉服太物と、 ーそ て諸 れ を盗ら 方から掻き集め ħ 暮 で の いことになるで  $\boldsymbol{b}$ 間 に た 間 た H 金 屋 が に 筋 は、 ^ ざ 0 老に 払 つ を 舗せ 11

?

0 戸前 もう ( ) のきしむ音でなけれ ちど異様 0) 物音。 そ ば れ な りませ は 夜 の 怪<sup>b</sup> 6 鳥り 0 声でなけ れ ば、 土 蔵

思 7 孫 隣 直 は の 部 て ع 引返すと、 屋 び起きて に寝て 帯を締 11 る 佐 体 れ 箪<sup>たん</sup>す め 0 孫三郎 上に置 直 に声を掛 ( ) 歩踏 てあ み つ け た 出 用心 そう ま た と 0 脇 ま 差を提 た げ が

を つけてく

な音

が

す

る

か

5

ちょ

13

と裏

の方を覗

いて来るよ。

あ

とを気

1

よく目 の覚めきれな い孫三郎のムニャ ムニャ言うのを背に 聞

11 た、 老支配人 の孫六は裏口からそっと外へ 出た様子です。

何 それ やら聞えたようにも思いますが、 ん。 からもの 0) 煙草を二三服吸うほど経って、 孫三郎もそこまでは判然わ 土蔵の方から、 か

りませ

きま 郎 は事態 やがて、 た。 0) 容易なら ワ ッ と押し潰されたような ぬ を直覚して、 弾き上げら 恐ろし e st れたように飛び起 声を聴 く ٤ 孫三

開 け 放したままの 裏 口 か : ら 跳 足 で 飛び出 した孫三郎は、 ようや

屋根 の波を離れた遅 ( ) 月 0 光 0 中 に、

たの あ 紅 です。 ッ、 に染んで土蔵 父さん それ は実に の前 に 瞬 倒 れ の間 て に (J る、 起っ 父親 た大動乱 の 孫六を抱き起し でした。 4

父さん、 どう した ん です。 誰 がこ ん なことを

な が ^ら藍を刷 **伜孫三郎** 姿です。 の腕 11 たよう、 の  $\dot{\Phi}$ に、 自 分の 辛くも挙げた 脇差に 胸 を貫 孫六 か 0 顔は れ て、 月の P は 光 Þ 頼 0 中な み少

父さん、 し つ か りして下さ *( )* 誰 がこんなことしたん です。 誰

が、 どこの 誰 が 父さん」

そう言う孫三郎 の顔を、 死に行 < 父親 0 眼は 凝じ つ 見詰 め

た。

「逃げたよ、 よその人だ、 ぁ 0 男だ」

^ 逃げ た んです

死 んで行く 孫三郎 は逃げ ·父親 た曲者を追おうとしましたが、 の姿を見ると、 それもならずに立ち縮みます。 自分の腕 0 中に

無駄だ、 -それより、 金を」

父親 の眼を追って行くと、 夜目にも鮮やかに輝きま 土蔵 の 入口 に は銭箱 が つ、 中 か ら

落散 つ た 小判が、 す。

持 金は って下さ 大丈夫ですよ、 *( )* いま誰 かを呼んで来ますから」 盗られやしません。 それより 気 を 確 か

に

待ってくれ。 俺はもう」

あ、 お父さん」

しっか りして下さ *( )* 父さん」

もう力 孫三郎 が 尽きた。 は 父親 b の 命 0 か、 を取止め 生 命 の最 ようと骨を折 後 0 痙い 攣れ が り ましたが、 走ると、 伜 そ 0 腕 の 時 は

が つ りと崩折 れ て しまっ たのです。

どう した、 孫三郎どん」

何 が 始 ま つ た ん だし

妹お梅とが 裏 П から 手 代 寸 に 0 徳松と、 な つ て飛 下 び 出 女 0 しました。 お 福と、 それ 少し 遅 に れ つ づ て 大勢 (J て主 0 奉公 0

人たち、 最 後 主 0 半 次 郎、 ح れ は ひ どく 取 て、 寝巻

帯を結べ んだ ŋ 解 11 た り、 死 骸 0 側 b 寄れ な 4 ほ どの 脅えようで

す。

Ŧi. 郎 ガ ラ ッ 八 が 鍋 町 0 現 け 戻 つ は、 翌

でした。

親 分、 落着 11 て 11 ち Þ 11 け ŧ せ 6 よ。 あ つ が 行 く 三河島

おびんずる野郎が来て、 町内の万屋茂兵衛を縛って行くじゃあ

おびんずる野郎てエ 奴があるか、 金太親

世間じゃ江戸 そのおびんずる金太親分の言 の岡 っ引は銭形 親分たった い種が癪じゃありません 分と言え」 一人のように言 か

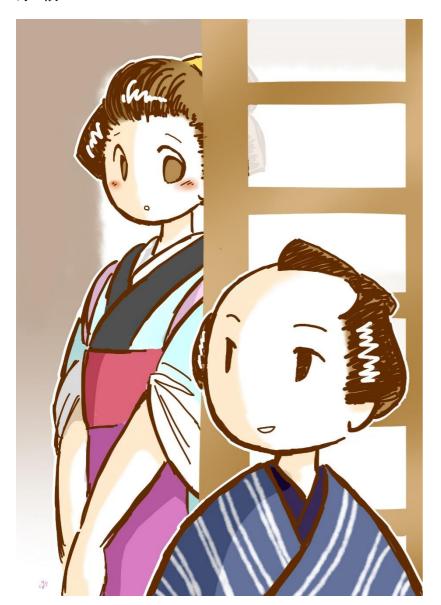
が も知れな お膝下の鍋町に殺しがあるのに、恋女房の傍から離れられな いが、 今ごろ子分の八五郎兄哥が顔を出すよう

の金太がさらって行くよ。 分も焼が廻 ったね。 左様なら お気 の毒だが下手人は だってやがる」 一と足先にこ

「まさにその通りさ。 なア、 お静」

平次はお勝手に いる女房の方を振り返 ってこう言うの でした。

恋女房のお静 は消えも入りた 心持でしょう。 お仕舞 の手を休 「まア」



©2017 萩 柚月

めて、 怨ずる の です。

だか 5 親 分、 ちょ つ と行 つ て見 て下さ *( y* 金 太親 分 は 見 違 11

をして e s る に違 (J あ りませんよ」

「それ だけ 判 つ て *( )* るなら、 お前 が Þ る が ょ か · ろう。 俺 は 女

房 の 傍を離 れ た な 11

お 前 さん

お静 はたま り兼 ね て、 障子越 しにたしな め ました。

縛 の 男だ お ったが、 び ずる親 خ درا 下手人が外から入 うのを楯に、 分 は、 孫六が った跡がな 死に際に言った 平常孫六と仲 ( ) んだから面 の悪 e s よそ 万屋 白 の 茂 11 兵衛 だ を あ

外か ら入った 跡がな e st ?

りませ

か

ね

親

分

逃げた様子 が な いと言 つ た方 が W ( ) か P 知 れ ません ね

面 白 そうだな。 b つ と 詳ゎ 話 せ

み、 です いません。 平次も膝を乗出 ガラッ八 こうな の手柄にさせるつも つ て来るとや しました。 最初 っぱ りで、 り、 から通り一ペ 岡 御輿をあげ つ 引本能が ん 0 ジ な 押 込 か ッ ع つ た 平 思 *( )* 次 込

塀 道 て か は 5 一方は土蔵 は恐ろしくヤワな忍び返しが打ってあるから、 な う、 三郎 e st る ところが、木戸は内から念入りに締 に が 決 飛び で、 つ て 出 一方は隣の家だ。 いる。 したんだか 万屋茂兵衛は一体どこから逃出したの 5 曲者は立 店 へ抜ける口 裏木 っていたというし、 戸 は から逃げる うっ つ かり触 で、 そこ

ガ ラ ッ 八 は唾を飛ば ながら弁じました。

親

分

俺 に 訊 11 た つ て 判 るも か、 番所 ^ 行 って万屋茂兵衛 に

な庭か 茂兵衛 らどこをどう逃げ だ つ て 鳥 や土竜 出 じゃ したというんで? あ りませ ん よ。 え、 あ 0 親分 箱 0 中 0

を殺 人数 俺 れ て の が て、 中 叱 大勢 5 土蔵 翁屋 れ て が ( ) 0 の店 庇ひ 出 るようだな。 合わり たところへ の者でな いと か、 e s 井戸 顔が ところで、 そ つ 0 e st と 紛ぎ 後ろとか、 なかったの れ 騒ぎにな 込む手 戸袋の かな った は あ るぜ 蔭とか 時 孫六 そ 0

平次はさすが に 細 か いところに気が つきます。

お び んずる 親 分 もそん なことを言 つ 7 いました。 万 屋茂兵衛 は、

か 隠 れ て 11 たに 違 11 な ( ) って」

で?

い 塩<sup>ぁ</sup>ん 梅ば に、 誰 も万屋 一茂兵衛 な ん か 見た者はあり ŧ せ ん 金

で、 太親 朝飯を三杯半 が 十 手を 振 食 り つ 冠 て つ e s て た 万 屋 に 乗込 ん で 行 温 か 味噌

ガ ラ ッ 八 の話 は しだ e st に 面 白くな ります。

蔵 ع か 戸 袋 0 蔭 に は、 足跡ぐら ( ) あ るだろう」

「そ つが一 つで b あ つ たらお笑い 種だ。この 月にな つ て から、

雨も 雪も 一度も降 らな 11 上 に、 あ 0 辺は家が建て込んで いるから、

ろく 霜 柱 も立たね エ

孫六 ちど 成 奴は 行 う って念入 な ん と怨 ( ) か、 しいな、 ん りに見て来 よく で 11 訊 る者 W は て見るが るが ちょ な うど良 13 e s か *( y* 4 家 *( )* か 修業じゃな ら手 者 の出るほど金 *( )* か に逢っ もうい て、

月の隈 親

分は

ガラ ッ 八 は 少し心細そうです。

それ が達者 近 頃は 俺 で は b さすが 外 で e s 0 応 噂 る頃は、 は に を 当っ かき集 一家 道楽が て 0 見 主人だか め るが て見よう。 強 < ら、 て潮来へ 11 馬 若主人の 鹿 なこともしな 追 W 半次郎は やら れて 先代 ( ) e st だろうが、 た筈だ。 の主人

ヘエ

たか、 後か。 きたい」 「それ 身份か から、 後 始末は誰が 5 孫三 郎 あ わ 0 声 どんなことをし てよう、 に 驚 11 着 て 飛 物 に び た 血 出 か 0 た つ 0 できる 61 は 7 誰 11 だ が た け詳 先 奴 で、 は な 誰 が

とだろう。 孫六が 抜かるな八、 よその者だ、 思 あ 11 の 男だ 0 ほ か 底が と言 深 つ たの ぞし は け の

片 付 た。 ガ ラ 4 下手 て ッ です。 町 0 が 内 挙 Ŧ. 0 衆 郎 が P が つ 親 bて 類方 う しまえば、 11 が ちど引 引 つ きり 返 あ は葬り な た 時 は、 に 11 0 翁き 仕 屋なる 度 ŋ が は 残さ す て な つ りま か ŋ

あ、 親 分

11

るだけ

たが、 八五 郎 物 馴 0 顔を れ た 見 商き ると、 ら 手 代徳 瞬 松 0 間 は ちょ に 取っくる つ とイ ヤ な 表情 を

御苦労でございます」

さり気なく挨拶するので た。 + 七 八 の典型的 な お たなもの

考えようでは一筋縄では ゆけそうもありません。

「ちょいと聴きたいが」

「ヘエー」

若主人の半次郎は、 勘当され て e s たそうだな」

「それは昔のことでございますよ」

「いつから家へ戻ったんだ」

先の旦那様が亡くなった時、 支配人の孫六さんが潮来からお呼

寄せにな って、 御親類方にもちゃ んと御挨拶をして家督に 直

した。ヘエ」

「それはいつのことだ」

「半歳ほど前でございます」

「あまり昔でもないようだな、 ところで、 近頃は身持が 良 e s

のかし

「ヘエー」

「変な返事だな、 まだ堅く はなりきれまい。 お前も i s つ 泳

ぎ廻るんじゃないのか」

「飛んでもない、親分」

徳松は面喰いましたが、 八五郎にそう鑑定されても文句 0) な e s

ような小意気な肌合いの男でした。

けさ孫三郎 の声を聴いて、 お前が真 っ先に 飛び出 したそうじゃ

ないか」

ヘエ、 番頭さんが起きた時 か ら眼を覚まして いましたから」

「お前の次は誰だ」

お福でした。 それからお嬢さんで、 あとは わ かりません。 大勢

の いっしょに飛び出しましたから」

主 の 半 -次郎は

後 で

確 主人は裏  $\Box$ か ら出て来たの か , 戸 袋 の蔭じゃ あるま e s

なし

主 お 顔を出 が 見 え しました な ( ) ん から、 で、 迎えに 間違 行こうとし (J はありませ て ん ( ) る ع ろ 裏 口

徳 松 に は 八五郎 の言葉の意 味がよくは判らな か つ た様 子 で

は敷 P り、井戸 廻 地 ラ パ 方 ッ の傍、 法 イ は はなく、 に建てた上、 徳 庇の下、戸袋の蔭を念入りに 松に 井戸 孫三郎を呼 は 厳重な柵をめ お勝手に喰 出させる間、 ( ) 込んで、 ぐらされて、 調べましたが、 裏口から土蔵 後ろに 横 ^ b 間 の 土蔵 裏 隠

れ

る隙

間

もあ

りません

は、 勢土蔵 なに た が されて、 つ 平 た 絶対 機転 昨 次に注意された戸袋の蔭は、 の前 夜 に不可 土蔵の 0) つ残る縁の下は、 0) きく 騒ぎは月が へ集まった時 能です。 下手 前に集まる人から眉毛までも読まれそうです 人 でも、 登 出て来て、 ってからだとすると、 野良犬除けに厳重に塞 孫六を殺し 身を隠せな 何喰 わ てどこ ぬ 顔をするということ e st かに 真向き e s であ 姿を あ か り 5 ま どん せ W

御 苦労 で

思案に暮 れ ガラ ッ 八 0 後ろへ、 打ち萎れた孫三郎 が 立 9 てお

りま

敵 は 俺 が討 郎 さ つ て か やる お 気 の 毒 だ ね。 力を落さ な e st 方が 11 11 親 0

有難うござ います」

9

ことも

ŋ

郎 はドン と胸でも打って見せた いような、 英雄的な気持に

なるのでした。

「ところでちょ つ 聴きた 4 が "、 土 蔵 0 鍵 は どこに あ る 6

親父 休ん で いる部屋 0 柱 に掛 け て あ りますが、 取ろうと思え

ば誰でも取れます」

宵 0 うちに鍵を持 つ て行 かれ ても、 気が つ か ずに 11 る あ

るわけだね」

「ヘエ」

「それから、 ゆうべ 裏 口から土蔵の前 のあたり は、 ょ つ 程 明 る

かったのか」

月 は 屋 根を離 て高 くな りか け て いま た か ら、 暗 11 家 か

ら飛 び出すと、 四方はよく見えました」

物 の蔭が あったろう。 庇の下とか、 建物 の 袖とか 間 が 隠

7 ら れ るく 5 ( ) はあ った筈だと思うが」

御覧 の 通 りで、 人一人隠れるような場所はあ り ません。

井戸 の中 へでも入ってブラ下が ってい れば別ですが、 車井戸

ですから、 そんなことをするとすぐ判ります」

, | |

土蔵 の入  $\Box$ は 霧り 除ょ け の下でちょ っと薄暗 か つ ただけ、 あ 何

ん 0 な 11 場 所 です。 親父が 逃げた -と言 つ た 時 四 方 を

か 見 廻 ったことは確か しました が、 です。 木戸は締っ すると間もなく裏口 てい ましたし、 から徳松どん この辺には誰 が な

出して来ました」

「それから」

つ づ いてお福 が 出たようです。 あとは五 六人 ( ) つ ょ で たか

5, が 誰 やらわか りません

わ れ る ٤ 家 0 中に下手人 が ある と思 11 込 ん だ、 平 次 0

鑑定も怪 しく な ります。

ところでもう ーっ 訊きた 4 が 翁<sup>ぉ</sup> 屋な の商売 の 方はどうだ つ た 6

だ。 り良く な 11 噂を聴 11 たよう に 思う が

け の話 でしょうか 親分」

ば 孫三 か ŋ 郎 苦 は み走 不安らしく八 つ た ع 11 うよ 五 郎を見上げました。 りは、 少し 粗 野な ります。 三十 感じ を 0 す 少 る 越

場 限 りだよ、 誰 にも言うわけじゃな € √

が

何

ん

とな

Ш

0

気

0

多い純情家らし

ζ

 $\boldsymbol{b}$ 

あ

マ な ら 申 します が 実はあまり良くな 方

若主 一人の 費 い方がひどかったようだな」

「それ ば か りじゃございません。 商売も手違 e st がありました。

難 場で、 問屋筋の 払 (J だけ でも二千両 は要る筈ですが、

親父は一生懸命に工夫をして千両ばかり 拵え、 それを土蔵の

中 に置 いた の です」

金 は られなかっ た 0 だな」

ヘエ 曲者が銭箱を持出したところを親父に見付 け 5

銭箱を投 ŋ 出して、 親父の持っていた脇差を奪 つ て 突 11 た の で

鞘ゃ は死 骸 0 傍に落ちて ( ) ました」

V 血 だっ たが、 家 の者で着物に血 0 つ ( ) て 4 た P 0 は な

か った 0) か

つきませ ん で た。 尤もあ ح で 死骸 0 片 付 け に 手

徳松 どんとお才さん は、 ひどく血 で汚れまし たが

若主人はお前 の父親を怨んで いるようなことはな か つ た 0

か

た。

「飛んでもない、親分」

「煙たがってはいたんだろう」

ら いますし、 そ んなことがあったかも知れません。 親父は忠義者でしたが、 この 上もな 主人と番頭でも、 ( ) 国者で したか 年も違

老番頭と道楽者の若主人との 関係が、 孫三郎 0 口ち 物が で *c* \ らか

判ります。

ヘエ お才さんとか 遠 い従兄妹同士ですが、 e s う 0 は、 若主 人 の 許嫁だと 来年の春は祝言することに  $\epsilon \sqrt{}$ う が 本 か

なっております」

「そのお才の実家は?」

苦にやんで自害し、 「商売の手違 いで没落した上、お才さん お才さんは大伯父に当るこ の父親は三年前 0 店 の先代 に そ に 引 れ 取

られ て、 今の若主人と許嫁 の披露を しま たし

若主人はお才を嫌 っているんではな ( ) 0 か

「そんなことはございませ  $\bar{k_{\circ}}$ お才さん は賢い 人 ですから若主人

もすっかり感心しております」

「浮気と許嫁とは別なわけか」

四

八五 郎 は 何 か 唾ば で b 吐きた 11 よう ん気に な りまし

次に 八五 郎 の逢 つ た のは若主人の妹、 お梅という十八 の娘でし

ゆうべお嬢さんが出た時は、 死骸の傍に誰と誰が いました」

さア 孫三郎と、 徳松と、 お福と、 あとは判 りません」

丸々と肥 った可愛らしい娘ですが、 兄の半次郎と違って性根は

なかなか確りしていそうです。

「兄さんは?」

「一番後から出て来たようです」

裏口 ^ 帯 ひろ解 け で出た半次郎 0 取乱 した姿は、 月 明 り 下で

皆んなに見られたのでしょう。

兄さん の道楽は 相変らずひどいようだね」

八五 郎 0 無遠 慮な 間 e s に、 お 梅 は眉を垂 れ まし た。 0 何

か言ったら、 ワ ッと泣き出してしまいそうです。

お才さんとお 嬢さんは? 仲が悪 いようなことは な ( ) で ょ

うな」

「お才さんは、よくできた人ですもの」

お梅は顔を挙げてきっぱ り言うの でした。

娘からこれ 以上何んにも引出せそうもな e s 判ると、 八

五郎はこんどはお才に逢って見る気になりました。

わざと人目を避けたお才の 部屋で、 至って質素な 調 度 0 中に、

に な ると ( ) う 娘は、 慎 み深く目を伏せます。

若主人 の道楽は ひどいようだが、 それでもお前さんは 緒 にな

る気に変りがないのだね」

|

立ちの淋り 才は 黙 し 4 って顔を挙げました。 姿ですが、 目鼻立ちも端麗に、 確と肯定した眼差です。 11 か にも聰明そうで、 少

道 楽者 0) 半次郎には、 幾ら か 煙たがられると言 つ た様 子が ありま

す

さん が 土 蔵 0 前 ^ 行 つ た 0 は、 何 時 頃だろう。 お 福 0 後だ

ろうと思うが

小僧 さ ん たちと 緒 で た。 私 0 部 屋 は 0 通 ŋ 裏 П ^ は

一番遠 くな っております か 5

殺さ れた 孫六を怨ん で の、 いる者はあるま 怨んでな ( ) な。 ح の 0

少し 固過ぎまし たが、 忠義一徹で、 よく奉公人たちにも眼をかけ

て Þ りました」

あ

な

良

11

方

ですも

ん

か

( )

るも

0

はあ

ません。

お 前 さ は?

で 縮く 私 尻じ は わ ったとき、 け ても番頭さん 孫六さん 0 がこの 恩を受け 家 0 て お 先代を説い ります。 てお 私 0 父親 金 を 出 が さ 商 売

な 骨 を折 つ て下す つ た か わ か ŋ ま せ ٨ 尤もそ れ が 反 9 て

手 違 4 な つ た ので、番頭さん は 4 つ でも 私に、 済まな 11 済まな

って e s ま した が

に な る 聰 明 な 娘 か ら、 ガ ラ ッ 八 0 引 出 せ 0 は た つ

れ だけ でし た。

次 に逢 つ た の は 若主人 0 半 次 郎。 ح れ は二 + Ŧi. ع 11 う 無 分 別

で、 頭 0 孫六 が 頭 を 押え て な か 9 たら、 ど ん な 脱 線をす

わ からな ( ) 道楽者です。

塩 つ つ ح 足 ŋ ッ ~ リした 何 丹 か 恐 次 郎 ろ 型で、 頼 言 ŋ うこと な ところが は賢そう あ で

のことを一 通 り話 して貰 いた いが

物 々 押 っ冠せる八五郎

に

う

です。

腹 と言 の 4 立 った つことがあ もう、 調子 うです。 何んにも って 知らずに 寝る前 に 寝てしまい 冷 で二三杯 ましたよ。 引 つ か けたが 尤も少し

「腹の立つことと云うと――?」

何 ア にほ ん の 些細 な内証事で、 ^ ッ、 ^ **ッ** ∟

親 死骸を見 分 の前だが、 ると、 誰だ ひどくあわてていたというじゃ って驚きますよ。 不意に脇差を突立てた死 ありませんか」

骸を 見 せ 5 れちゃ、 あれを見て驚かな ( ) の は、 身に覚え

る奴ばかりで――」

んな 問答を重ね て も無意味な ので、 八 Ŧi. 郎 は ( ) 11 加 減 て

切り上げました。

٤, うやがて日暮れ これは三十過ぎの でしょう。 出 戻りで、 念 此方 のた め下 で訊きた 女 の お ( ) 福 こと に 逢 の三倍も物 つ 7 見る

を言う肌合いの女です。

思ったら、 す 夜半近くまでですよ。 つ かり寝そびれてしま お嬢さんと旦那様と何にか言 あ の騒ぎでしょう。 お蔭でお嬢さん いましたよ。 驚 *( )* た い合っていなすって、 の隣 0 間 b 驚 な 0 か < 部屋に な 口 11 寝 1 て 口 とし e s る私は、 え、

と言った調子です。

お 梅さん と若 主 人は、 何 で喧 嘩 を た 2 

喧嘩じゃございませんよ。 ほんの言 ( ) 合いで、 何ん でも、 鍵ぎ

がどうと 千 両がどうとか、 三百両で e s いとか

郎 は 屋まと りしました。 秘密 緒と は ここからほ ぐ れ

の阻

さっそく お梅を呼 ん で、 ゆうべ 兄と争 ったことを訊きまし たが、

娘はサメザメと泣くばかりで何んにも言い ません。

何 でもございません。 お才さんが可哀想だから身持 に気

をつけるようにと言っただけです」

千 両とか、 三百両と言ったそうだが

そ はお福 の夢でしょう。 よく飛ん でもな e st 夢を見 る ん

ら、ホーー」

や梅は泣き顔を綻ばせて笑うのです。 『ころ

鋭鋒を避けて、 若主 0 半次郎に会 少しも要領を得させません。 つ て 同じことを訊きまし たが、 れ み

五

親分、 こん なことだ。 □ < 惜ゃ しい が 少しも判りませんよ」

ガラッ が 帰った 0 はもう 雀 色時、 平次 はそれを待ちく

煙草ば か り吸って いるところでした。

お前にしちゃ上出来だ。 だんだん 目鼻が つ e s て 行 く じ Þ な 11 か

平 は 報告を聴 くと、 自 分 の手持ち の材 料と 照 合せて 何

独り呑込んでいるのです。

「どんな目鼻で、 親分」

拠 は 真っ すぐに、 若主人の 次郎を指 て ( )

「ヘエー」

「半次郎 げ の道楽は 身<sup>み</sup>請け 止まな 相 談 に 11 な つ て 近頃は吉原の いるそう だ。 何 下 んとか言う女に つ 引 をや

べさせると、 年内に三百両 の金を積んで根引をする約束だとさ」

の「ヘエ

三百両

それを持出そうとし て、 妹 0) お梅に 意見されたんだろう。 夜

の言い合いというのは多分それだ」

姿を を持 た。 番 な て 半次郎 頭 e s いや煙草二三服というから、 た そこを番 の忠義も、 とも 脇差を奪 さ れちゃ叶 は かく、 妹 頭 0 意 道楽息子には通 つ 0 翁屋が立つか潰れるかという千両 孫六 見を聴か て胸を突 わ な に見付 i s から、 ずに いた か 意見をする暇がな が、 って、 じなかった。 とう 生懸命止めたに違い 孫三郎が出て来たの とう土蔵か 強意見をされ いきなり孫六の持っ か ら金 った 0) た 金だ。 箱 ん あるまい。 で驚 を持 かも知れ それ 出 て

「どこへ隠れたのでしょう、親分」

「そいつが判れば、半次郎を縛るよ」

半次もハタと当惑した様子です。

た、 「若主人を庇 「孫六が伜に介抱され よその人、 った あの のだよ。 男だ ながら、下手人のことを訊 \_と 言 忠義な番頭は、 ったのはどう 自 分は殺され いうわけでしょう」 か れて ながらも 逃げ

それはあ りそうなことで す。 曲者は絶対に外から入 5 な 61

気の毒じゃない

主人を助けようと思った。

翁屋へ行 って見 ま しょう か

孫六

は誰

かを庇

って

いた

に

違

4

あ

ŋ

ませ

一そうしよう。 ح こで考えるよ り、 ん な 0 顔 で b 見 た らまた良

い智恵が浮ぶかも知れない」

そこは 次とガ ちょうどお通夜で、 ラ ッ 八 は、 つれ立 ってもう 家中が抹香臭くなっ 一度翁屋 てお りま

0 お たり家 を別室に の 中 呼 び入 の空気を見ると、 れ 鼎<sup>かなえ</sup> なっ て静 平次は若主人の半次郎と、 か な話 を始 め ま 妹

11 た の は、 誰と誰です」

ね、

御主人、

隠さずに言

って下さい。

番

頭

の孫六が

日頃庇っ

て

平 0 問 11 は 変なも 0 でした

が 私 は 叱 e st 5 れ通しで、 孫六は妹のお · 梅と、 従はなる の お才を可愛

とい う のは?」

つ

て

ま

したよ」

お 梅 さん を可愛がる の に 不 思 議 は な e s が • お 才さん を可 が

の差金 と思 は、 あ *( )* 詰 でしたよ が 父親が身上を仕舞 め て 余計な世話 いた様子です。お才をこの家へ を して、 つ て、 反 身投げまでするように つ て商売を 引取 41 けなく つ た 0 P, た な つ 孫六 らだ た

そう 聴 く とありそうなことですが、 そ れ が 事 件 0 鍵 に な ろうと

も思われません。

「ところで、 ゆうべ 御主人は土蔵 か ら金を持出そうとし た筈です

半次郎とお梅は顔を見合せました。

うとした。 隠さずに言 それを妹さんが意見した、 つ て 貰 11 た · 1 三百両持ち出 聞 て、 かずに夜中 女 0 身 請 け に行 って

金箱 の千両を持出 したが、 孫六 に見とが められて

百 両持出そうとした は 違 う。 親 分、 のは本当です」 こう な れ ば皆んな言ってしま いますが  $\equiv$ 

あ

兄さん」

お梅は驚いて、兄の袂を引きました。

け、 聴 う 殺したん が 、な非道 あ お前 ( ) て て 金箱を持出 つ 下さ ま た後で気が は ったん 黙 なことは でしょう。 *; y* つ て して、 です。 私が三百両持出そうとすると、 ( ) ろ つく しませ 私は仕様 ٤ 夜中までそれで喧嘩しましたが、 孫六に見とがめられ、 皆んな言ってしまった方が 妹 0 の隠 な した鍵を誰か持 ( ) 道楽者ですが、 逃げ場がな 妹は土蔵の鍵を隠 出 ( ) 孫六を殺すよ いよ。 て土蔵を開 < あ な の騒ぎ 親分、 って

ともか 半次郎 くも筋だけは通 は 一生懸命でした。 ります。 そ 0 弁 解 は 暗 i s ところだらけで すが、

「鍵はどこへ隠しなすったんだ」

平次はお梅を顧みました。

お勝手の戸棚へ入れておきました」

お梅はそう言うのが精いっぱいです。

「親分」

ガラッ八は後ろから平次を突きます。

え つ、 黙 つ て 11 ろ、 まだお前などに 判るも

通夜 の坊主 0 眠そう な経が聴えて、 夜は しだ e s に更けて行きま

六

す。

は 命 関係者一 じました。 昨 夜 孫 同を、 六 が 殺 昨 さ 夜と同じ順序で土 れ 刻 そ れ 蔵 ょ 0 ŋ 前 ほ 駆 け 少 附 け 遅 るように 平

たちが で来ま 除ょ 土蔵 け 0 の戸前 下 た 寸 にな は Ŧi. つ 開 づ 郎 つ が けたまま、 7 11 駆 て 倒 徳 け れ 集まると、 て合 松 図 平次はどこか お 福、 をすると、 お 梅、 そ に 0 番 身を隠して、 後 先 か ら 孫 おオ 郎 Þ が そ 霧り

お Þ 親 分

りま れ ると どこか せ もな か。 に身を隠 大 勢 し て 0 な *( y* た か 筈の 交ţ 銭形平 つ て、 次 二 ヤ は 二 ヤ 何 笑 時 つ どこ て *( )* か る 5 で 現 は わ

下手人の 隠れ て i s た 場所 に、 俺もちょ つ ح 隠 れ て 見た の

です 親 分

屋根を離 れ て 中天 に 昇 つ た れ 明 る 11 月 光 0 下 人 間 人 姿を せ

る場所などはあろうとも

思

わ

ませ

ん

主人が

いちばん怪

か

つ

た。

( )

ちば

ん

後

で

裏

 $\Box$ 

か

5

出

た

を、 刺して逆に 11 皆んなで見て しかし大勢 飛び込む隙 e s の人が な は け な れ 順 ば い筈だ」 々 に飛 俺は び き 出 つ ع て 主 来る を 裏 縛 П 9 たに 違 頭 11 を

と塊 平 ŋ 次は な 顧 み つ て他を言 て 平 次 0 4 ま 論 す。 理 0 発展に 翁屋 の店中 固かたず を呑 0 者 ロみます は 月 0 光 0 中 に ひ

だ。 主人 下 b 手 徳 松 は、 でも 裏 口 か お 梅 5 さ 出  $\lambda$ た 姿を でも、 誰 に お 福  $\boldsymbol{b}$ でも 見ら な な 11 か P つ ち 間

孫三郎

で

な

脇差を孫六 曲者は孫六 0 手 と土蔵 か 5 奪 の前で り、 顔を あ つ と言う 合せると、 間 に そ 重 0 4 金 胸を突き、 一箱を 投げ 裏 てて か

た

かな た ら孫三郎が か あ つ んまり近 たのだよ」 飛び出す *( )* の のを見ると、 曲者が隠 あ ゎ れ て て b が 土 との土蔵 蔵 は 誰 0 中 b ~ 入 つ

あ つ、 成程」

滑 取 才さん」 り出 孫六 つ は 大勢の 協差で てそ 0 中 人が土蔵 突 に か 紛 れ れ込んだ、 な の前 がらも、 へ集まると、 曲者を庇 それに相違あるま 曲者はそ つ た。 孫 っと土 六 が 息 蔵から な、 を お

半次郎 0 許嫁 折 れ 0 お 才は、 です。 平 次に指さされ ると、 そ 0 まま タ

崩 X た 0

X

蔭 伜 孫 三 心 ながら翁屋 お 郎 真 は 挙 に 間 げ 5 の家業 妹 に 返 れまし のお梅を娶合 り、 回復に たが そ の心 つと . せて、 持を実行 お めまし 調 べ 中 翁屋 た。 頓死。 に 移す 0) 家督 た 半次 を め ゆず 郎 に 死 は り、 W す だ つ 自 か り は 改

件落着 0 後

親 ょう 分、 お才 は 何 ん だ つ て土蔵 か ら金を盗 み 出 す気 に な つ た ん

郎 は 相 変らず 平 次 に 説 明 を せ がみま す

身清け 思 お 梅 あ つ 憎 0 0 言 女 ん は だろう」 な ( ) 争 利 つ た。 いを聴 つ 「過ぎた たような せ め 11 て、 が、 て 金を 馬 生 7 < 鹿 隠 れ つき嫉妬 なことを諦 づく半次郎を夢中にさせ たら、 が 半 ひどか 次郎が三百 め る かも つ た。 知 両 れ 持 る な 相 手 郎 ع

「孫六まで殺すのは、 ひどい じゃありませんか」

た。 孫六はお才を庇 自分の家を潰 いしたり、 ったが、 お 父親に 才は 自殺をさせたのは孫六のせ 決して孫六をよくは 思 わ いだ つ

と思ったのかも知れない」

ヘエ」

折 亡ぼしになるまい」 「怖い女だな。 つ てかき集めた金を持出 罰当りだ。 だが、 借金だら や つ け ぱりもとは半次郎 して、 な翁屋 女を身請すると の身上を棄てたく が 悪 いう ° 1 5 番 0 は、 頭が W 骨を よく

\_ ヘ ッ \_ 前なんか

つまらない

罪を作るんじゃな

いぜし

思

い詰

め

る

女よ

り、

思

11

詰

め

させる

男

0

方が

罪

が

e s

お

八五郎 は 向罪をは 作りそうもな , 長 ん が e s 顎を撫 でました。

(編注)

ます。 底本の 作品中には、 なる古典的な文学作品でもあり、 が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異 ままとしました。 身体 の障害や人権に ご理解、 ご諒承のほどをお願 かかわる、 著者が故人でもありますので、 差別的な語句や表現 い申し上げ

挿絵―萩 柚月

初出 「 オ ル讀物」 昭和十六年十二月号 文藝春秋社

底本 「錢形平次捕物全集」 第七巻 河出書房 昭和三十一年八

月五日初版

編集・発行 銭形倶楽部



## 銭形倶楽部

http://www.zenigata.club/